

どこか気になるヨーロッパの都市⑥

## グラスゴウ（スコットランド）

——「ザ・セカンド・シティ」——

高橋 哲雄

「ザ・セカンド・シティ」とは

グラスゴウは、世界遺産都市（一九九五年指定）であるエディンバラと並ぶスコットランドの有力都市である。

両都市の距離は四六キロと京都・大阪間にほぼ等しい。高速道路、鉄道はもちろん運河でもつながっている近さなのだが、東海岸のエディンバラは北海に、西海岸のグラスゴウは大西洋に顔を向けていて、互いにそっぽを向いた感じに見える。そもそもアイルランドという子犬を従えて東に向いて走っている巨人のかたちになぞえられる大ブリテン島の、ちょうど首に当たるいちばん狭い海峡の両側を扼しているのがこの二つの都市なのである。エディンバラは咽喉に、グラスゴウは盆の窪に当たる。ついでながら、アイルランドはついで行く子犬ではなく送り狼というべきだろうとする見立てもある。

両都市の果たしてきた役割からいえば、この喩えは逆でなければならぬ。エディンバラは咽喉ではなく盆の窪、そしてグラスゴウが咽喉と言った方がいいだろう。盆の窪は脊髄から脳につながる経路に当たり、咽喉は肺や胃腸への入り口である。言いかえると、エディンバラは脳・神経系統にあたる司法・金融・学問（とくに医学）・文化の街であり、グラスゴウは呼吸・消化器系統にあたる商工・運輸業を司る街といえる。およそ対照的な性格の都市なのである。

そのグラスゴウは一八世紀以来「ザ・セカンド・シティ」と呼びならわされてきた。ああ、スコットランドで第二の都市、つまり首都であるエディンバラに次ぐという意味なのだなど簡単に受け取りやすいところだが、じつはそうではない。ロンドンに次ぐ大英帝国第二の都市というのがその意味なのである。一九四六年にグラスゴウ大学の

オークリ教授が『ザ・セカンド・シティ』というタイトルでグラスゴウの歴史を書いて、その辺のいきさつをあきらかにしている。要点を紹介しよう。

それによるとグラスゴウは一六〇〇年には人口五千人、スコットランドで一番目の町でしかなかったが、一六六〇年には二位に跳ね上がる。オランダや北欧向けの北海貿易中心の東海岸都市の優勢が崩れてきたからだ、それでもなお一七〇〇年頃で人口二万ばかりの主教座聖堂と大学がある市場町にすぎなかった。それが、一八世紀のうちにエディンバラだけでなくバーミンガム、リヴァプールやマンチェスターなどのイングランド諸都市をものいで、英帝国第二の都市になった。

その最大の引き金は一七〇七年の英蘇合邦である。外国貿易を制限されていたスコットランドの都市は、合邦による貿易先解禁によってアメリカ貿易という宝の山を掘り当て、とくにグラスゴウはタバコ、砂糖、綿花の取引で繁栄を極めた。対照的にエディンバラは宮廷（一六〇三年の同君連合）に続いて議会をロンドンに奪われ、一国の首都であることをやめた。

さらに一九世紀にはいるとグラスゴウは一時人口百万を超え、ヨーロッパ第四の都市となる。綿工業に続いて造船・造機・化学などの工業が継起的に集中したからである。世紀末には順位を六位に落とすが、それでもヨーロッパ周縁部の従属国の、それも首都でもない町としてはおどろくべき躍進というほかない。一八九〇年に人口八十八万

（周辺部を含む）のグラスゴウを超えたのは、三百八十万のロンドン、二百二十万のバリ、百万を少し超えるベルリン、ウィーン、そしてわずかに百万を切るサンクト・ペテルブルクといったヨーロッパ大國の首都群のみであった。ということは、ローマもマドリッドもアムステルダムもリスボンも、あるいはバルセロナもヴェネチアでさえも、ヨーロッパの北西端に立つこの新興都市の急速な発展のまえには敵ではなかったことを意味する。もはやグラスゴウはスコットランドに属するというよりは、イギリス大西洋帝國の中核都市と言った方がぴったりする存在となった。大西洋の時代の到来に追いかぶせて産業革命の時代の到来がグラスゴウを押し上げたからである。

その産業技術力のほどは、たとえば、すでに一八八〇年代には殖産興業の日本政府がもつとも頼りになる「御雇外国人」として招き入れた最大の集団の一つがグラスゴウからの技術者であった事実によっても裏書きされよう。東大工学部の前身工部大学校の創設者ヘンリ・ダイヤーはここから派遣された。グラスゴウ大学は日本からの造船技術留学生の受け入れ先のメッカであった。早くから日本語の受験さえ認められ、留学中の夏目漱石が出題を依頼されたこともあった。

### ネクロポリスの丘

さてもう少しエディンバラとの比較にこだわらる。エディンバラはしばしば「北方のアテネ」と呼ばれた。その「アテネ」には三通りの意



ネクロポリス

味があると考えていい。

一つは古代の学芸中心地としてのアテネである。一八世紀のヨーロッパを席卷した啓蒙主義の大波のなか、エディンバラはヨーロッパ有数の知識人の集まる場の一つになって、その知的活動の高さが古代アテネになぞらえられた。彼らの溜まり場であるフラットや学寮、パブ、クラブやコーヒーハウスは古代アテネのポリスに擬せられたのである。

もう一つは、いま見たローマが世界の中心になって以後のアテネであつて、一七〇七年の合邦によって政治的独立性を失い、属国的な「北ブリテン」の首府の地位に転落したエディンバラはローマ支配下のアテネに見立てられたのである。

第三の意味はアテネとの外形的な相似性である。一八世紀から一九世紀初めにかけてのエディンバラは旧市街の狭さ、不便さ、不潔さを解決するためあたらしい街づくりを模索し、そのさい古典的、とりわけギリシヤ的なプランをよく意識した。世界遺産に指定された新市街のいたるところにその面影が読みとれるが、同時に、より直截的にアテネのアクロポリスを再現しようとしたのである。街の中心にそびえる城山に向かい合うもう一つの丘であるカールトン・ヒルの上にパルテノン神殿の遺構を出現させたのがそれである。「北方のアテネ」の呼称はこの景観にも由来する。ナポレオン戦争の勝利を祝い、戦死者を悼む合祀所として建てられたのであるが、当時のギリシヤ熱からそういう形になった。この丘にはほかにモネルソンのモニュメン

トやヒュームの廟など、あるいは合邦の、あるいはスコットランド・ナショナルリズムの記念碑的な建造物が競い合っているけれど、圧倒的な存在感を示すのは、この「ナショナル・モニュメント」をおいてほかにない。

グラスゴウでそれに当たるものはあるか。街の東端に立つネクロポリス——共同墓地——の丘がそれである。

この街はクライド河の北側（右岸）を、流れに沿って東から西に長く伸びている。街の古い中心は今の街の東部に始まった。大聖堂はまさに東の端に立ち、その少し西に大学が出来、間を南のクライド河に向かつてハイストリートが伸び、河の手前に古い高札場に当たるグラスゴウ・クロスが出来た。商人たちの集まり、取引が行われる場所である。周辺は庶民の喧騒の市となる。街の繁栄に伴い、市街は西に広がり、富裕な商人たちは西に移り、公的な行事の中心はジョージ・スクエアにおかれ、ソークシホル通りやブキャナン通りのように高級なショッピング街もいくつかが出現した。大学もさらに西にあたらしいキャンパスを求めて移る。

取り残された感のある東の街外れとの境界を区切る溪流の外縁に立ちあがる丘がある。「縦の森」と呼ばれ、商人会館（町政を仕切る商人の団体）の所有地であったのが、一八三三年に市によって取得され、共同庭園墓地になった。スコットランドで初のネクロポリス（古代都市の共同墓地、あるいは死者の都）と呼ばれる。高い丘のないグラスゴウで市を一望できるほとんど唯一の俯瞰地であり、しかもあたかも大

聖堂の光背であるかのような特異な位置に立つことから、西の大学前広場と並んで街の象徴的存在と言えるだろう。エディンバラを象徴するモニュメントが城とアクロポリスであるのに対して、グラスゴウのそれが大学とネクロポリスとは、両都市の差異を示すものとして興味深い。それにしてもお墓山が都市のシンボルとは！

アクロポリスは元来城砦の丘の意であるが、エディンバラでは実用的な意味はもはやなく、そこに林立する「ナショナル・モニュメント」をはじめとする記念碑群は都市風景の点景をなす風景式庭園というフォーリー（人工的廃墟 点景建造物）にすぎなかった。機能があるとするればネルソン像のように合邦賛美かデュガート・スチュアート記念堂のようにスコットランドへの敬意といった広い意味で政治的な意味合いといったところだろう。何といても元首都なのだから。

ところが、商工業都市であるグラスゴウでは単なるフォーリーではなく墓地という、はっきりと実用的な価値を持たせた。といっても「その特別な場所と規模からして、だれもが同意するわれらのもつとも卓越した市民の遺骨の聖なる埋葬所たるべく選ばれた」とされる。なるほど頂上に高さ二〇〇フィートに及ぶジョン・ノックスの像が建立され、街の発展を担った商人たちや東インド会社の役員といった「帝国の栄光」にかかわった人びとの墓が多くつくられた。しかし、そうした枠から外れた人びとの墓も少なくなかった。

まず国籍の枠がなく、グラスゴウの発展への貢献のほどを問われることがなかった。ポーランドの自由主義義命革命家、ドイツの機関車

製造業者、パリのフエンシング教師といった人びとが埋葬された。そもそも埋葬第一号は、コレラで死亡したユダヤ人の羽ペン商人であったのだ。子供の死亡率の高さを反映して子供の墓も多数だった。この街を代表する建築家でありデザイナーであったチャールズ・レニー・マッキントッシュは四人の幼児を失ったが、彼はここに印象的なケルト十字の警官の碑を残している。彼と並ぶ卓越した建築家で、ギリシャとエジプトの折衷様式にこだわったことから「グリーク・トムスン」と呼ばれたアレグザンダー・トムスンも彼の最高傑作と目されるセント・ヴィンセント通り教会の施主である長老派の牧師の碑をつくっている。キリスト教の墳墓でありヒンズーの神殿である巨大な霊廟もある。つまりここは、宗教的にも国籍からも、身分も階級も建造様式も、すべて開放的な「建築的ワンダーランド」(ロバート・クロフォード)なのであった。グラスゴウがスコットランドの都市というよりはアメリカの「五一番目の州」と呼ばれたことも、あながち見当外れとは言えない「メルティング・ポット」(るつぼ)ぶりである。

### 「賃貸アパート」の誇り

「死者の都」から生者の住む街に移ろつ。

グラスゴウは「テネメント・シティ」と呼ばれる。テネメントとは、平たくいえば賃貸アパートのことである。そういえば街の全体が安っぽく聞こえるかもしれない。しかし、この呼称はグラスゴウっ子

自身によっても、少なからぬ誇りをもつて愛用されてきた。

賃貸アパートは大陸からオランダ経由でスコットランドに入ってきた。イングランドを飛び越してのことである。小所有者意識の強いイングランド人は小さくても玄関と前庭のあるテラスハウスを好むからだといわれる。たしかにランカシャーのスラムでさえ大陸のスラムとはちがって、アパート方式でなく、「バック・トゥ・バック」と呼ばれる独特の棟割り長屋方式がほとんどである。

しかし、その原因としては、実際には法制度の違いが大きいと考えられる。イングランドの都市では普通地主が建設業者に土地を開発させるとき有期のリース契約を結ぶ。そのさい地主は土地を返されたときの価値低下を恐れて、質の低い開発を防ぐため一定の条件をつけるのが通例だ。とくに先祖伝来の土地だと眼先の地代収入より長期的な利益を優先させる。したがって賃貸アパートのような過密になる物件への投資をいやがる。

それに対してスコットランドでは特有の永代賃借制度があつて、地主は高額の権利金を受け取る代り、地代が支払われている限りは土地を返してもらえない可能性がないので、土地の将来価値に関心がなく、高密度居住を防ぐような条件は付けようとしなない。開発業者としても永代借りの権利金の負担のうえに毎年の地代支払いがあるので、その分土地を集約的に利用せざるを得ない。つまりは高層化と細分化である。スコットランドで真っ先に都市づくりが行われたエディンバラの旧市街が高層の賃貸アパート群と狭い路地の街になったのは当然の成

り行きというものであった。

エディンバラは知的中産階級の街である。一八世紀七〇年代の職業構成では三分の一が知的専門階級で、八分の一がビジネス階級、グラスゴウは逆に三分の一がビジネス階級で、八分の一が知的専門職であった。

彼らは一八世紀半ばに旧市街の狭さとわるい居住条件から離れて新市街を建設し、そちらに移った。そのさい彼らが主に選択したのはテナメントではなくテラスハウスであった。テラスハウスはやはり長屋、あるいは一続きの共同住宅であるが、単独の玄関もあれば、前庭、あるいは半地下のドライ・エリアもあって、法曹、医師、教授といった専門職階級の人びとの生活意識や社会的体面に合っているのか、そちらが好まれたようである。賃借アパートの街区もあつたが、それらも往往テラスハウスに似た外見を装い、「偽お邸」と揶揄された。「ゲイトフル」とか「ドアリフター」と呼ばれた玄関ドアの開閉装置は、そうした住まいで愛用された。ビジネスと労働者の街であるグラスゴウでは、あるいはぜいたくとされ、あるいは「エディンバラ人の非友好性」の象徴だとして、あてこすりの対象にされたものである。

グラスゴウのビジネス階級の人びとは、対照的にテナメントを愛好し続けた。もつとも富裕な商人のなかには郊外に独立した豪邸を構えたものもいたし、一部は西に広がる新市街の街区にテラスハウス群をつくりだした。それらは彼らの富の源泉をかたどって「ジャマイカ・

ストリート」とか「ヴァージニア・ストリート」といった名を町名とした。しかし、多数の商人は、カルヴィニズムの影響もあって、富を顕示することを好まず、つましい生活様式を守り、総じて住居も小ぶりであった。三―四室のフラット住まいが普通で、上の階には職人、最上階には一般労働者が住んでいた。フラット住まいとあって、女中も一、二人で済ませた。テラスハウスは階の上下動があるので、人手が余分に要る。

彼らは、エディンバラの専門職や地主たちと違って、賃借アパートに引け目を感じて「お邸」を偽装するようなことはしなかった。一九世紀前半の人口急増期に乱造されたテナメントは、同じ建物の一階に店のある質屋や酒屋を大家とする粗悪なもので、低い社会層の象徴と見られていたが、世紀が進むにつれて状況は大きく変化した。まず、テナメント自体のレベルが上がった。七―八室から少なくとも三―四室を占め、部屋は広く天井は高く、窓は広くなり、各種の出窓も現われ、同じクラスのイングランドの小さなテラスハウスよりはずっとましだとグラスゴウっ子は胸を張ったし、事実なかなかのものであつた。

一八九二年に建てられたフラットが、タイムカプセルに入れられたように、一九一一年以来六四年間二人の母子によって動態保存されてきた。それが「テナメント・ハウス」というミュージアムとしてナショナルトラスト（スコットランド）によって公開されている（一九八三年開館）。方形の玄関の間から寝室、居間、台所、バスルームに通

じ、便所もある。熱湯の出る洗面所や、レンジ、火床、タイル張りの暖炉もあって、共用部分の玄関と階段には装飾タイルが貼られ、窓には絵ガラスが入れられていた。裏庭には干場と洗濯場があった。母は仕立屋、娘は速記者でつましく身を立っていたのであるが、中流下層に属する彼女らの収入で維持できる、平均以下のフラットのレベルでもこの程度の内容があり、外観も石造の、それこそ百年間びくともせぬ堂々たるものであった。

そればかりではない。名のある建築家たちが競ってテネメントを手掛けた。エディンバラでもそういう例はあるが、グラスゴウ市は有名建築家を総動員したかたちで多くの街区で腕をふるわせた。基本はジョージ王朝風であるから、基本的な古典的簡素さはそのままに、ヴィクトリア朝の活力を加え、さらにエキゾチックな香りがしばしば添えられた。パリのアパルトマン街とは別趣の空気がそこにはただよう。歴史家デイヴィッド・デイチズは「一九世紀グラスゴウのテネメントは、最良のものは明確で印象的な建築様式を示し、このスタイル——正確には一連のスタイル——は街に真の個性と威厳を生み出した」と述べている。グラスゴウ商人の合理性と誇りが「テネメント・シティ」を都市の紋章に押し立てたのであろう。

### 陰画の部分

たしかにグラスゴウのテネメントには、今日われわれが「賃貸ア

パート」の呼称でイメージを喚起されるのとは一味ちがった、発展途上都市に特有の活力も豊饒もあった。しかし、その面だけを取り出すと偏った印象に導かれかねない。

忘れてはならないのは、逆の意味で一般的なイメージを超えたすさまじいスラム世界の現実もあったことである。産業革命の進行——グラスゴウはその先頭に立った——につれて状況は一変した。テネメント方式が仇になって、グラスゴウの都心部にはイングリッドの商工業都市をはるかに超えた過密状態が生まれることになる。

ずっとあとの一八八〇年のことであるが、街の人口の二五%が一部屋の住居に住まい、一部屋アパートの一四%、一部屋アパートの二七%に間借り人が入っていた。五室以上の家に住むのは八%にすぎなかった。典型的なスラムでは、二室のうち一室に家族が、もう一室にときには一〇人を超える間借り人が男女混ざり合って入りこんでいるといった状況がめずらしくなかった。一九一二年になってもスコットランド——といってもグラスゴウがほとんどであるが——の一—二室居住率はイングリッドとウエールズの六倍もあり、都心全域がさながらブラックホール。簡単には壊れない地元石材の頑丈さも仇になつた。ふつうどの都市にも見られる郊外へのスプーロール現象はここではずっと遅れてしか現われず、しかも中流階級に限られた。

グラスゴウの帝国第二の都市への道を開くのに貢献した負の側面はもう一つあった。奴隷制である。タバコと砂糖が一八世紀グラスゴウの繁栄を支え、綿・機械・造船などの産業革命への道を開く原資に

なったこと、同時にアメリカのタバコ、西インド諸島の砂糖プランテーションがアフリカ黒人の奴隷労働に支えられていたことはよく知られている。アフリカーアメリカ・西インド・ブリテンの「死の三角貿易」の要に当たる都市の一つとして、グラスゴウは果たしてわが身に突きささる棘をどう認識したのだろうか。

直接の加害者——少なくとも受益者——であった「タバコ王」たちが深紅のガウンを羽織つてのし歩いていた都心のグラスゴウ・クロスには彼らを見下ろしてウイリアム三世の騎馬像が立っており、その像には「ヨーロッパを奴隷のくびきから解放した」というラテン語の銘文が刻まれていたのは、まことに皮肉なことと、詩人のロバート・クロフォードは言う。それにしても、奴隷貿易といえば、リヴァプールやブリストルが悪名高く、グラスゴウがそれほど口にされないのはなぜだろうか。最盛期にはタバコ貿易では全英取引の五割を超えることもあったのに。

### 街に生きる大学

その関連で注目したいのは、ここは司(主)教座のおかれた聖堂(エディンバラにはない)都市であるとともにエディンバラよりも古い大学町であり、その大学は、奴隷制が世界的にクローズアップされた一八世紀には、めざましい改革によってヨーロッパ世界でも屈指の質の高い研究・教育を提供する大学となっており、エディンバラ大



グラスゴウ大学本部

学と並んで「スコットランド啓蒙」を牽引する力となっていたことである。

大学の改革が成功したのにはいくつかの要因があるが、注目したいのは都市立地の有利さである。

まず、ほどよい規模の都市であったこと。ロンドンは大きすぎ、オクスブリッジは小さすぎる。スコットランドの二つの都市大学はその点理想に近かった。大学の力がときには市政を動かす働きを見せる場合もあった。たとえば、ジェイムズ・ウオットが職業ギルドに妨げられて科学器具の製造を起業できないでいるとき、グラスゴウ大学はその古くからの特権を行使して構内での営業を認め、彼の飛躍の土台を提供した。こういうことはロンドンでは起こりえなかつただろう。

また、どちらの大学も、合邦によって、イングランド、アイルランドの大学から締め出されていた非国教徒の人材を集めることができた。アダム・スミスの師でありグラスゴウ大学の教育システム改革のリーダーであったフランシス・ハチスンがこの道徳哲学の教授に就任したとき、学生数は四〇〇人であったが、うち二〇〇人はスコットランド外からであった。当時のイングランドの大学、とくにオクスフォードが沈滞しきつていたこともある。

さらに、ここにはエディンバラに対して優位に立つ面があった。合邦以来斜陽都市化し、街も活気を失ったエディンバラに比べると、当時のグラスゴウは街が美しく安全だった。「みどりの窪地」という元の意味の面影をまだ残したうえ、中心部はかたちを整えつつある商業

の街であり、市議会が建築基準を厳密に定め、税制上の優遇や助成金を投入したテナメント群や公共建築物をつくる計画的な街づくりが進められつつあった。世紀中ごろには重大犯罪はほとんどなくなり、乞食も姿を消した。一四歳のアダム・スミスが進学に際して、故郷のカーコーディに近いエディンバラ大学でなく、それをはるかに通り越したグラスゴウ大学を選んだのは、両都のうちでは首都の方がより多く「放蕩と犯罪の地」であったからであるらしい。

最後に、この商工業都市の中心的存在であった商人・金融業者・職人との関係が基本的に良好であった。大学の人事権をにぎっている市議会を実質的に支配していたのは少数の商人グループであったが、彼らはいかにも興隆期の事業と都市を担うにふさわしく自由闊達な心性の持ち主たちで、広く優秀な人材を登用し、任用した教授たちとの間にも相互に信頼があった。スミスとタバコ商人であり銀行家であり市長を務めたコクレインはいくつかのクラブや協会の会員仲間として互いに認め合っており、コクレインの知識や経験は『国富論』のなかに生かされているといわれる。スミスの伝記作者であるJ・レーは、スミスが「オクスフォードに残っていたら、おそらく経済学者にならなかつただろう。またもし、一生のうち大切な時代をこれほど長期にわたってグラスゴウですごすことがなければ、あれほど優れた経済学者になれなかつただろう」と述べているが、うなずかされる。地域が狭かったため、学生や教授と商人、職人とのつながりが密であり、商人の息子たちの多くが大学に進んだ。

他方、スミスは「スコットランド啓蒙」の精神を体現する知識人の一人として、奴隷制度に言及し、『国富論』のなかでもそれを批判的に取り上げている。奴隷を「経済財」としてクールにとらえている反面、「高貴な未開人」が「卑劣な奴隷主」あるいは「牢獄の屑ども」によつて奴隷の身分に落とされたことへの憤りが直截に表明されていたりもする。またスミスの弟子でグラスゴウ大学の後継教授となつたジョン・ミラーはもつと明確に奴隷制を「害悪」と断定し、「その類のものがイギリスの領土内にいまも残っているとは残念だ」と述べる。スミスの師であるハチスンも奴隷制には反対であり、代表的な三教授が、奴隷問題が裁判の形で反対運動になる前に先駆的に批判的知見を表明していたことは、微妙な立ち位置の——教授の任免権は基本的に商人ギルドの合議体の中にあつた——この大学にとつて、やはり名誉といわねばなるまい。しかし同時に、商人側としても、批判を受けはしても、大学人グループとの友好的な関係を保ちつづけておられるのはわるいことではなかつた。スミスやブラック、カレンといったリベラルな大学人との親しい関係が「奴隷商人」の悪評をマスクする作用を幾分か果たしたかもしれないからだ。

商人たちは、貿易で巨大な富を獲得したわけだが、奴隷貿易への加担という一点を除くと、彼らのビジネス行動は総じてまともと言つてよかつた。

まず信用を重んじた。彼らの立ち上げたいくつもの銀行は幾度かの破綻を経験したが、その処理では常にフェアにふるまつた。一七九三

年の恐慌のさい閉鎖したグラスゴウ・アームズ・バンクにはコクレイン、スパイア、グラスフォードといった大物が関与していたが、債権者に全額を償還した。一八七八年のシテイ・バンクの倒産のさいも、役員たちは私益のためではなかつたものの、関係した不渡り会社に無担保の貸し付けを行ったかどで起訴され服役したが、整理委員会は債権者への償還の努力をつづけ二年後には九割を返済した。オークリは「当時のグラスゴウ・ビジネスマンの誠実さをよく反映しているすぐれた達成」と賛辞を送っている。

またこの街の飲食店では一九世紀末以来「信用払い」(honour system)、つまり客が飲食した額を自己申告して払つて行くという珍しい慣行が定着していて、ロンドンからも見学者があるほどだつた。ガルブレイスの『スコッチ気質』によると、カナダのスコットランド系銀行では無給の新人行員に事故は覚悟で相当な額の現金を扱わせるという過激な研修をおこなつていたという。これも信用の大切さの实地教育ということか。

彼らの暮し向きはつましなかつた。「儉約は必要ではなく徳である」とされ、召使の数は往々教授たちの家庭よりも少なく、仕事場近くの賃貸アパートに住んだ。マンチェスターの、おもに綿工業で富を築いた金持ちたちが警備ゲート付きの豪邸村をつくつて周辺社会と隔絶したのとはおよそ対照的で、同じ「資本」といつてもこうも違うものかと考えさせられる。

商機に敏で商人としては極めて有能とされたが、他方では金儲けだ

けに関心を集中させるのではなく知識欲、好奇心に富み、学問や芸術、農耕といった広い文化的関心も併せ持っていた。幾人かはその富と感性を美術に注ぎ込んで、バレル・コレクションやケルヴィングロウプ美術館のような瞠目すべき街の目玉が出来る。これに比肩する規模・質の美術館はリヴァプールにもマンチェスターにもない。この面でもグラスゴウは「帝国第二の都市」なのであった。

スミスはのちにやはりエディンバラと比較して「少数の澆刺たる商人がいる方が宮廷があるよりはるかによい」と述べ、また後者の治安や風儀のわるさを「下男が多すぎるから」だとしている。

奴隷問題に戻る。グラスゴウの商人が彼らのもっとも活躍した一八世紀にはその能力をフルに發揮しながらもいわばお行儀がよく、信用を重んじ、シヴィックな感覚を身に付け、金の使い方についても粗野でなかったことは、その稼ぎ方における汚点をいわば「ロンドング」(ロバート・クロフォード)するの役に立ったであろう。近江商人についてしばしば言われる「利に敏にして散じるに吝」(平生飢三郎日記)として嫌われはしなかった。

ただ、教授たちの側については、皮肉な見方をすれば、それは単なる主張以上のものではなかった。スミスが学内人事で示した原則論と実際の決定との乖離をここでも見ることが出来るかもしれない。そこには奴隷制を打倒し、奴隷貿易の環のどこかの部分を断ち切るつとといった姿勢はむりとしても、商人たちとの親交を活かして事態の改善に実効をあたえる施策を考えようとした気配もない。

ヴォルテール、ルソー、トマス・ペイント、ヒュームやスミスを比べればあきらかなように、そもそもスコットランドの啓蒙運動にはフランスやイングランドのそれとちがって、基本的な民主的権利をペンの力で戦いとりうといった強烈的な意思がないのが特徴といつてもよい。リベラル・ラディカルのウイリアム・コベットが「スコットランドの似非哲学者ども」と切つて捨てる所以である。それは彼らが文明社会の原理のひとつとした寛容の徳のもう一つの顔なのかもしれない。重商主義の批判は行うが、個々の事例による糾弾はないし、地主・貴族体制批判はしない。大貴族の家庭教師という、教授職よりはるかに恵まれた職を望んでいて、実際に受けもしたからである。はるかに民衆的なスタンスの詩人バーンスでさえも、ワーズワスに先立ってフランス革命非難に回ったのである。

職人や熟練工についても一言。彼らの学習意欲は高かった。もともとカルヴィニズムのもとで基本リテラシーを身につけているうえに、産業の交替が頻繁で必要な技術の変化も急速であったため、学習せねばならず、夜学や日曜学校、技術教育訓練所などが盛んで、大学もそれにこたえるかたちで施設を供与した。物理学のアンダーソン教授の街の学校づくりの努力は、のちのストラスクライド大学の母胎として結晶した。

スミスは、エディンバラとグラスゴウをトゥルーズとボルドーに対比させ、両グループの間にはおどろくべき類似があると言い、高等法院のある住宅都市の下層階級は怠惰で貧困、放縦だが、資本を動かす

商業都市のそれは勤勉で飲酒を慎み、豊かだと見ている。産業革命の到来がこの街の労働者にイングランドのどの工業都市に比べても苛酷な——と多くの識者が見なした——運命を与えるまでには百年を要しなかった。

## 「第二の啓蒙」

私はここまで、いい時代——「黄金時代」と言われる一八世紀——のグラスゴウに長居し過ぎたように思う。

この時代は由緒のある大聖堂と伝統のある大学の街が田園的環境を十分残したまま、いわば開国によって成長軌道に乗り、主導的な商人グループの活力によって植民地を踏み台にして、また見方によっては首都エディンバラの犠牲において、経済立国をリードするかたちで繁栄を遂げた時期といえるだろう。

その時代を代表する人物の一人としてこれまでスミスをとりあげてきた。彼はこの街に学生時代の三年間と教授としての一二年間を過ごし、その間には生まれたオクスフォード時代にはけつして得られなかった師友に恵まれ、多くの見聞を積み、『道德感情論』を世に送った。彼とグラスゴウの相性はこのうえなく良好であるかに見えた。

しかし、グラスゴウから享けた数多の恩恵にもかかわらず、スミスはここを永住の地に選ばなかった。グラスゴウの教授職を辞して、バクルー侯の家庭教師になりグラントツアーに出かけたスミスは三年後

に帰国して故郷のカーコーデイなどに隠棲して『国富論』の執筆に専念した。それが完成した二年後の一七七八年にスコットランドの関税委員にという話があつたのをきっかけにエディンバラの旧市街に居を移し、一七九〇年の死までそこを終の棲家とした。スミスはグラスゴウ時代にも駅馬車を利用して朝家を出て昼餐をエディンバラでとり、午後と夜を過ごし翌日の昼餐までにはグラスゴウに帰るといふ訪問を繰り返していた。それほどエディンバラの友人たちとの交歓は貴重なものであつた。散歩の際にはときに異臭に悩まされつつも旧市街に住んだのも、友人たちの多くが清潔で美しい新市街よりこちらに住んでいたからではと、伝記作家I・S・ロスは推測する。もっとも親しいヒュームは新市街に住んでいたが、旧市街寄りの地区で、スミスの館からは一五分ほどであつたらうか。

スミスの移住は、グラスゴウにとって一つの時代の終わりと言つてもいいだろう。その頃産業革命はフル稼働に入っていて、すでに数多の問題を噴出させつつあつた。この大工業都市は急速な工業化・都市化の宿命的な課題——労働・生活条件の悪化——を避けて通るわけにはいかなかったが、スミスはそれを眼前にしないで済まず幸せを得たと言えるかもしれない。逆にいえば、彼がグラスゴウに留まりつづけていたら、『国富論』は現在のかたちをとっていたかどうか、少なくとも重要な補遺あるいは改訂がなされたかもしれない。

そうした社会問題の延長線上にやがてグラスゴウは急進的な労働運動の舞台となり、「赤いクライドサイド」として勇名をはせるまでに

なる。また独立労働党という、労働党の母胎の一つとなった興味深い政党、もしくは政治・思想団体を生むことになる。創設者の四人中ケア・ハーディ、ラムゼイ・マクドナルドら三人のスコットランド人を含んだこのユニークな人道的社会主義を奉じる政党は一八九三年に創設されたのち一九〇六年には労働党に吸収されるが、第一次大戦に対する非戦主義によって主流と離れたのが戦後信頼され、復縁後両大戦間期の二回にわたってマクドナルドを首班に労働党内閣を組閣することになった。しかし大不況処理に失敗、党の分裂を招く。第二次大戦後は党勢が伸びず、一九四五年にグラスゴウから三人の議員を選出したのを最後に労働党に吸収された。

こうした工業の街、労働者の街、さらには社会主義の温床としての顔が、いつしか、かつての黄金時代のイメージに代わって、この街を見る眼をかたちづくるようになった。

しかし、今日グラスゴウを訪れるとそこにはイングランドの大都市——バーミンガム、マンチェスター、リヴァプールといった、いずれも工業と労働に生きる都市——とは異質の不思議に華やいた空気が漂っていることに気づかずにはいられない。それは一八世紀に骨格が出来た街の風格といってもいいし、残照といってもいいかもしれない。比較した三都市はいずれも典型的な一九世紀都市である。だが、それだけではない。

グラスゴウは、労働運動の昂揚期とほぼ重なって、文化的にはまったく独自のあたらしい世界を切り開いていた。

ここでヴィクトリア時代末期のグラスゴウで催された二つの国際博覧会に注目したい。一八八八年と一九〇一年。最初の一八八八年博覧会は五七五万人を集めたが、この数字は一八五一年の有名な第一回のロンドン博の六〇四万、六二年の二回目のロンドン博の六二〇万にわずかに及ばぬ健闘ぶりである。前年のエディンバラ博が二七七万にとどまり、同年のバルセロナが二二四万であったのに比べると、相当な好成績と言わねばならない。次の一九〇一年博はそれをはるかに上回る一一五六万で、パリで行われた三回を除くと一九世紀中のいかなる国際博も及ばない集客数であった。街の知名度や魅力、位置、後背地の魅力——要するに博覧会自体の集客力以外の要素の之差——を考慮に入れると、ロンドン・パリに迫る善戦ぶりは光る。帝国の「ザ・セカンド・シティ」は伊達ではなかったわけだ。

もともとグラスゴウは国際博覧会向きの都市であるのかもしれない。大西洋に直結する港町で世界の商品を取り扱う術に長け、地元産業の業種は極めて多彩、周辺を含めて製作される物品がこれほど多様な都市はブリテンには他になかった。とくに機械、器具類につよいのは、あたらしい文明の先触れとしての博覧会の使命に合致するところがあった。

一八八八年博ではスウィッチバックの鉄道に機関車を走らせ、四〇社に近い造船業者に史上最大のモデル・シップ展示をおこなわせた。すべてクライド造船・造機業の栄光を誇示するもので、ロシア皇帝のヨットや当時世界最大の蒸気船「ニューヨークシティ」号のモデルも

展示された。ショウにはインドの「タバコ・ガールズ」の実演もあり、日に二〇〇〇本もの、糸で縛る手巻きタバコの「妙技」が披露された。絵画部門でもっとも人を集めたのはロバート・ギップズの「ザ・シン・レッド・ライン」で、クリミア戦争の際、圧倒的多数のロシア軍の攻撃を前に二列横隊で立ちはだかったハイランド連隊の武勇を讃えたものである。指揮官はグラスゴウ出身のコリン・キャンベル。スペクタクルとしての「帝国」とそれを支える「産業」の役割をみごとに、あるいは露骨にスペクタクル化したものと言えよう。

この博覧会で得られた収益はすべて博物館と美術館、それにアート・スクールをつくるのに投じられた。第一回ロンドン博の収益がサウス・ケンジントンの博物館群の建設に投じられた先蹤にならったものだが、同時にグラスゴウの隠れた芸術志向のつよさをも物語る。芸術といっても建築、デザインといった応用アート性のつよいものに傾斜するのは土地柄であって、レニー・マッキントッシュのような不世出の才能がこの万博を機会に開花することになった。彼の代表作となった若き日の傑作グラスゴウ美術学校（一八九七年部分完成）は博覧会がなければ存在しなかった。また会場の正面に出店したミス・克蘭トンのティーハウスは人気を博し、この街にエキゾチックなティールーム文化の花を咲かせる端緒を開いたのであるが、そこでもマッキントッシュは有名な「ウイロウ・ティールーム」を初め、いくつかの店の内装・装飾をデザインした。

マッキントッシュに「グラスゴウ・ボーイズ」と呼ばれた画家グ



ヒルハウス (1910)

ループを加えて、世紀交替期のグラスゴウに「第二の啓蒙」の名が与えられたものの、傾きかけた陽を長く引きとめることはできなかつた。マッキントッシュは一九一〇年にヒルハウスをつくったのちグラスゴウを去り、建築モインテリア・デザインもやめて、水彩画に転向、ロンドンで亡くなった。ダブリンは多くの天才的文学者を生んだのに、留まりつづけた人はいなかった。グラスゴウの場合も、スコットランド啓蒙の時代のスミス、カレン、ブラックらはエディンバラに移った。時が移ってマッキントッシュもグラスゴウを去った。

## 二都物語をもう一度

グラスゴウ人には Glasgow という独特の親しみを込めた呼び名が定着している（これまでグラスゴウっ子と訳してきた）。マンチェスターにおける「マンチェスター・マン」という誇りを込めた呼び方に似ているが、エディンバラ人にはそうした愛称はない。

グラスゴウっ子は「磨かれていないダイヤの原石」で、そのもてなしぶりは、必要とされるときはとくに、伝説的だといわれる。対岸のアイランド人に似ているかもしれない。私は街の中心のジョージ・スクエアの真ん中でダブルデッカーのバスの上から帽子を飛ばして困ったことがある。つよい風に煽られて転々と飛びまわる帽子を、車の交通量の多い広場を追い続けてくれた一人の丸っこいおばさんの親切を忘れることが出来ない。あれがグラスウェイジャン・ホスピタビ

リティなのだと思う。対するにエディンバラ人は人が訪ねてくると「お茶はお済みでしたか」と挨拶するのが常だといわれる。「京のぶ漬け」に似た冷たさをもつこの街を終の棲家にする知識人が多いのは、しかし、それを帳消しにするだけの懐の深さがあるからにちがいない。こういう言い方もある。「エディンバラ人は毛皮のコートを羽織って、下着はつけない。ゴージャスだが、怪しげだ」と。歴史ある首都の底深さが生むふくらみというべきか。ただ、それを嫌ってエディンバラから「亡命」するミユリエル・スパークのような作家もいる。

エディンバラは一八世紀以来二世紀にもわたって鬱症状に悩まされてきた。なにしろ啓蒙の時代のご先祖が偉すぎた。合邦というご一新で家邸も田畑も失った跡継ぎの長男にとって、ご一新の見返りに与えられた商権を活用してのし上がった、グラスゴウという性格のまるでちがう弟の存在も気鬱のタネになった。朝廷まで江戸に奪われたうえ、近辺では瀬戸内の水運に恵まれ、羽振りの良い弟にあたる「天下の台所」大阪が「難波の都のほうが平安京よりずっと古いのだ」などと言いつつ図を想像すればいい。エディンバラ人の屈折は、グラスゴウにも一因をもつ長い鬱の時代の産物かもしれない。

やがて気鬱を散らす機会が訪れる。一九四七年にはじまり毎夏つづけられているエディンバラ国際フェスティヴァルがそれである。ブリティッシュ・カウンシルが後押ししたクラシック音楽、オペラ、バレエなどの祭典は第二のザルツブルクを狙ったものだが、みごとな成功を

おさめる。しかし、ここをザルツブルクを上回るといってよい存在に押し上げたのは、実は招待されなかった八つの演劇や舞踊分野を中心とする団体が勝手連的に夏の同じ期間に始めた、のちに「フェスティヴァル・フリンジ」(周辺)と呼ばれる参加自由の非公式芸術祭なのであった。大道芸まで含む各種各様のパフォーマンスはいまでは二五〇演目、二万公演にも及び、世界最大の芸術祭といわれる。それと並んで映画、書籍などの国際フェスティヴァルが一〇種以上も八―九月に集中し、さらにほかの季節にも一〇種前後の祝祭がこの街を舞台におこなわれるのだから、まさにエディンバラはピクチャレスクな舞台装置を活かした祝典都市としてよみがえった。

他方、「羽振りのいい弟」はどうなったか。

九〇年代の終わりころであったか、グラスゴウを何度目かに訪れたとき、思い立ってクライド河を下流に向かって外輪船で時間をかけて往復してみた。丸一日の旅である。川沿いのところどころに現代的意匠の公共施設や民間の研究所などが立つてはいるものの、全体としてのクライドサイドは衝撃的なまでに長大なドックや船台、倉庫の産業遺跡の連続であり、さびれた元工業町の繰り返しの出現である。何より印象的だったのは航行する船の数の少なさであった。

ダニエル・デフォーが描き出した一八世紀初頭の牧歌的で理想的な住みやすさと美しさを具えた町は同じ世紀の後半にはスコットランド啓蒙の中心として、またスコットランドの台所ともいうべき商工業の面でも多様な人材を惹きつけて、都市としてのある成熟を実現するに

いたった。それは外国、植民地貿易で巨富を得た過程でもあった。ところが、その半世紀のちには初め綿業、のちには製鉄・機械・造船・海運業へと進む産業革命の進展によるいつそこの致富、その反転したネガ像としての過密、不衛生、犯罪、貧困の地獄図を生むまでになった。そしてさらには公害の大発生源にもなる。いわば二段ロケットの上昇局面を経験し、一段目は他者を踏み台にして勢いよく飛び出したものの、二段目では内部のトラブルも抱え込み、その後遺症にいまも追われているというわけであった。

クライド河の三〇キロに及ぶ長い現代の遺跡の旅のあいだ、こうした過程が胸によみがえった。ものごとの悪化は急激に進むが、回復は時間を食うものかをあらためて実感させられた気分になった。

しかし、他方ではクライドの水質は私が初めて訪れた一九六〇年代末に比べると三〇年ばかりの間にあきらかに改善されていて、川風にも悪臭を感じないですんだ。他方では街筋はあちこちで落ち着いた風格を見せるようになり、とりわけ大学・美術館地域であるケルヴィングループの一带や郊外のバレル・コレクションの周辺はグラスゴウの過去の富裕と栄光を抜きにしては生まれえない稀有の財宝である。グラスゴウ市民のもっともよく訪ねる場所はケルヴィングループの博物館と美術館であり、入館数はサッカーの動員数を上回る。マンチェスターの「コトノポリス」にならってエディンバラを「ミュゼオポリス」(博物館の都)と呼ぶことがあるが、それは街の全体を指すのであって、必ずしも街が蔵しているコレクションの質量を言うわけでは



クライド川の今日。コンファレンス・ホールとモート・ハウス・ホテル



クライド川沿い。工場の廃墟

なく、ましてや愛好者の数を指すわけではない。コレクションについていえば、グラスゴウに軍配を挙げる向きも少なくないだろう。

同じことはやはりハイカルチャーに属するクラシック音楽の世界についてもいえる。国際フェスティヴァルの輝かしい実績からみても、エディンバラの優位はゆるぎないものと大方は思うであろう。しかし、あれはほとんどが借りものなのである。音楽祭の発想自体がロンドン由来であり、またスコットランドの楽団のほとんどがエディンバラではなくグラスゴウに本拠を置いていることを知る人は少ない。スコティッシュ・チェンバー・オーケストラもロイヤル・スコットティッシュ・ナショナル・オーケストラも、BBC・スコティッシュ・シンフォニー・オーケストラも、スコティッシュ・オペラも、さらにはナショナル・シアター・オブ・スコットランドも、すべてグラスゴウからの出前なのである。

歴史の功罪が俄かには判定できないように、都市の優劣——トップかセカンドの——も判じがたい。エディンバラが丘陵群の景観においてグラスゴウにまさり、河川の規模・景観において劣ることは衆目の一致するところだろうが、全体をとおしての優劣を問うとなると、それはむづかしいし、意味もあるまい。ただ、その個性の違いを愉しめばいい。しかし、競い合う両者が拮抗した力を持ち、かつ対抗意識がつよいほど、愉しみが濃くなることはたしかである。最近(二〇一三年)出たばかりの詩人ロバート・クロフォードの『グラスゴウとエディンバラ』というまことに珍しい両都市の比較論のなかで、著者は

言う。

グラスゴウっ子のいない宇宙に住めるのはエディンバラ人だけだし、エディンバラのない星に生きられるのもグラスゴウっ子だけだ。ほかの連中は誰だってこの二つがいの頑迷な街を愉しむことができるし、両方に注意を払わないでスコットランドを理解するなんて、誰にもできない。

グラスゴウは一九九〇年に、世界遺産とはいかないが、「ヨーロッパ文化首都」に選ばれた。アテネ、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリン、パリに次いでEU委員会による選出である。それでも不満であるのが、実力のほどは「友情あるライバル」がおそらくいはんよく知っているだろう。すでに一九世紀にエディンバラ生まれの作家ロバート・L・ステイブンソンはその故郷への思いにあふれた『エディンバラ——ピクチャレスク・ノート』(一八七九)を、こう締めくくっている。

グラスゴウの方々には一言だけ申し述べたい——黄金の言葉だよ——私はまだグラスゴウについての本を書いていない、と。

蛇足であろうが、この名エッセイを書いたエディンバラ人の、グラスゴウへの限らないオマージュと、私には読める。